資料と通信

林亨泰文学会議について

三木直大

二〇〇一年十一月三日に、台湾の真理大学で「林亨泰文学会議」が開催され参加した。主催した真理大学は台北郊外の淡水に位置し、現時点では台湾で唯一の台湾文学系をもっている大学である。一九八七年の戒厳令解除後の自由化にともなう政治状況の大きな変化と台湾意識のたかまりのなかで、周知のように台湾の文化状況に大きな変化がもたらされた。台湾における台湾研究の発展はそれを象徴するできごとともいえよう。いまでこそ台湾研究そのものが台湾でメジャーな研究分野となったが、しかしここに至るには台湾で台湾文学系を大学につくるという至極当然と思われることがらにしても、そのために乗り越えなければならない多くの障害があった。

真理大学にはじめての台湾文学系の設立が認可されたのは、私立のしかも新設の大学であったからである（前身は淡水工商管理学院）。いまでこそ国立大学でも台南の成功大学に台湾文学研究所がつくられるようになり大学院生の募集もするようになったが、以前は社会的・政治的障害があり、政府が許可をしなかった。国立台湾大学をはじめとして大学に中国文学系はあって、今日ではそこに所属する学生たちも台湾文学研究をするようになったが、以前はそんなことさえ難しかったことを付け加えておかねばならない。とはいえ、日本統治時期の日本語文学研究までは、とうてい中国文学研究の範疇に入れることはできないだろう。

最初にも述べたように、この「文学会議」は真理大学の主催だが、大学のなかだけの小さなイベントではなく、行政院文化建設委員会の資金援助がなされ、そこからの来賓もあった。また今回は、林亨泰の出身地の彰化県政府文化局との共催になっている。一九九七年からはじまったこの「文学会議」は、今回で五回目である。台湾文学史上に大きな貢献のあった文学者たちが、この会議の対象となっていて、これまでに巫永福・葉石濤・鍾肇政・王昶雄が取り上げられている。基本的には本人が出席し「台湾文学家牛津賞」（「牛

者を記念して記念学会が開かれる。このイベントを「文学会議」と称している。今回の林亨泰文学会議のコーディネーターは真理大学の教授であり、台湾文学研究者であり文芸評論家の彭瑞金氏である。

林亨泰は詩人で一九二四年生まれ、台中近郊の北斗出身で、現在はやはり台中の彰化に住んでいる。現在の台湾師範大学の前身である台湾師範学院を卒業。卒業後は郷里にもどって、地元の高校や専門学校でながく教鞭をとるほか、大学で日本語教師をつとめてきた。台北での師範学院時代に、台中出身者を中心とした文学グループ・銀鈴会の同人として、二二八事件後の「台湾新文学運動」時期に作品を発表しはじめる。一九五六年に三〇年代上海の雑誌『新詩』のメンバーであった紀弦を中心とした「現代派運動」に本省人の中心メンバーとして参加。また、一九六四年には本省人による詩グループである笠詩社の創設に参加している。林亨泰は日本語で詩を書き始め、やがて中国語に切り替えていった「二つの言語を跨ぐ詩人」であり、戦後台湾の現代詩を代表し、陳千武とならんで、現代詩史の展開の節目節目で大きな役割を果たしてきた文学者である。

「文学会議」は詩人・李魁賢（以下敬称は略した）の記念講演「林亨泰的典型」をかわきりに、以下の五名の論文発表が行われた。

・趙天儀「論林亨泰的詩與評論」（コメンテーターは向陽）
・三木直大「林亨泰中文詩的語言問題」（陳明台）
・郭楓「感覺靈光的詩美投影──評林亨泰詩作藝術」（李魁賢）
・蕭蕭「台灣現實主義詩作的美學特質──以林亨泰為驗證重點」（白靈）
・孟佑寧「林亨泰詩語風格〈異常句〉〈走樣結構〉之分析…《林亨泰詩集》為分析場域」（陳凌）

また最後に李魁賢・白靈・蕭蕭・向陽を発言者とした「台灣詩教育展望」と題したシンポジウムが開かれた。

私と、発表者中唯一の女性で若い研究者の孟佑寧を除くと、台湾ペンクラブ会長の李魁賢、静宜大学文学院長の趙天儀をはじめとして、詩人でもあり大学でも教鞭をとるといった人々が名をつらねている。また、あわせて発表者の世代、発表内容にも多様性をもたせる工夫がしてあった。

午前中は唯一の例外である私の報告を除いては、開会の辞にはじまり林亨

泰への賞の授与、李魁賢と趙天儀の発表などはすべて台湾語（閩南語）で行われた。このことは驚きでもあったが、主催者の側にとっては台湾文学系なのだから台湾語が主要な発表言語なのは当然という考え方があるのだろう。ここにも現在の台湾意識のあらわれの一例がある。私の発表は外国人だから「国語」での報告になりますという紹介がおこなわれた。いわば私だけはへたくそな漢民族標準語での報告を許してもらい、司会に日文系の陳光輝氏、またコメンテーターに日本語のできる陳明台氏をお願いしてくれるという配慮まで、企画者の彭瑞金氏はして下さっていた。

私の発表は、林亨泰という詩人の五〇年代とりわけ現代詩派運動前期の作品が、四〇年代後半に台湾の知識人と大陸からやってきた知識人たちによって『新生報』副刊『橋』などを舞台に展開され、林亨泰自身もそこに参加した「台湾新文学運動」時期の作品と連続性をもっているのではないかという主張をベースにして行った。台湾文学史では、「現代」と「郷土」がしばしば対立項のように登場する。七〇年代には西欧モダニズム文学の影響下に発展した戦後台湾の現代文学のあり方への批判が「郷土文学論争」となってあらわれた。その論争を経て、今日では小説のジャンルでは「現代」と「郷土」は対立するものではないという当然のことでもある整理が行われている。しかし詩のジャンルではこの問題はまだ明確に整理されていないというのが私の考え方である。「現代文学」派の小説だけにとどまらず、「現代詩」派の「現代詩」も「郷土性」を当然排除するものではなく、また林亨泰作品の特質は現代性のなかに台湾の郷土性を表現したものだといえる。同様の指摘そのものは彭瑞金をはじめ呂興昌や陳芳明の著作にもあるが、そのことを実証的に論じたものはないように思えるし、また「台湾新文学運動」期の活動との文学的連続性を作品そのものから説明したものはみかけない。報告はいずれ真理大学から出版されるであろうし、日本語版を補足してあらためて発表する予定である。

最後に少し議論になったことがらを記しておきたい。それは私の報告そのものへの反応というより、むしろ台湾文学の定義に関連する用語の意味や用い方についてだった。たとえば林亨泰は五〇年代に発表したある論文のなかで「現代主義即中国主義」[1]と書いている。これは五〇年代台湾における「現

で「現代主義即中国主義」[1] と書いている。これは五〇年代台湾における「現代主義」詩の起源を、同時代的な西欧からの「横の移植」よりも、中国古典詩や漢字という文字のもつ伝統的な象徴性に基づく「縦の継承」によるものだと論じた評論に登場する言葉である。質問は、この「中国主義」とは何かを問うもので、私の発表の引用部分に関連付けながら会場から出た。私の考えは、林亨泰のいう「縦の継承」には実は言外に日本統治期の日本語詩の達成という問題が潜ませてある。しかし発表当時の五〇年代は国民党による白色テロの時代であり当時はとても「台湾主義」とは書けない、そこで「中国主義」という言葉を使っている、しかし林亨泰のなかではここでの「中国」は「台湾」の意味ではないかというものである。とはいえ林亨泰が「中国主義」という言葉を用いたことは事実であり、現在の台湾意識のたかまりのなかでは、用語として「台湾」を用いるか「中国」を用いるかがそのまま政治的立場を表現してしまうところがあるから、この問題をめぐっては林亨泰もその場にいるし、非常に微妙な議論になった。

また私が別のところで発表した論文中の「台湾は日本統治下にあったから、台湾の詩人たちは、きわめて複雑なかたちでこの戦争に関わることを強いられた。そして日本の敗北によって、戦後が出現する。中日戦争において、結果的に台湾は戦勝国であった」という記述[2] に対する趙天儀からの批判もあった。私がこう書いたのは台湾は日清戦争によって日本に割譲されたという歴史的事実を述べており、また「この戦争」とは私の論文のこの記述の前後では「大東亜戦争」と関連づけて用いている。趙天儀の批判は「一九四五年の日本の敗戦時、台湾も負けた側だった。ところが変わり身早く、台湾は一転して戦勝側になった。それは台湾人に反省の機会をなくさせた。じっさいは負けた側だったのにである」といった認識によるものである。これもまた台湾の独自性をどう考えるかと深く関わった問題ではある。今なお台湾文学研究が、こうした政治的な問題とどうしても切り離せないで存在していることをあらためて実感させられた催しでもあった。

註

1）中國詩的傳統、現代詩第 20 期、1957

2）“東的時間”與“西的時間”－林亨泰的〈美国紀行〉－、人間文化研究
第８号、1998

(naomiki@hirosima-u.ac.jp)